

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

**\*1980年ケニア日食で使われた MK カメラの写真を収蔵**

この記事は「日食観測に用いられた観測器械の写真を収蔵」という表題でなく「日食観測に用いられた観測器械を収蔵」というものにしたかった。歴史的な観測器械を収蔵することが筆者の使命の第一義であるからである。当初は、まさに「1980年のケニア日食で使われた MK カメラを収蔵」という表題で記事を書き終えたのである。その記事に載せた MK カメラが写真1であった。しかし、その記事を公に発表する前に読んでもらった1980年のケニア日食の観測隊員であった I 氏がこの写真の器械は MK カメラではないというのである。そして当時の論文、天文月報記事を見せてくれたのである。

筆者も記事を書く前に東京天文台報、天文月報の記事は読んで、ケニア日食の観測装置のどの部分ということを確認して記事を書いたのであったが、いかんせんケニア日食に参加した当事者でなかったため、光路図の MK カメラが写真のどの部分か確認できず、写真2の暗幕に包まれたものが MK カメラと考えてしまったのである。



写真1 素性のわからない観測器械

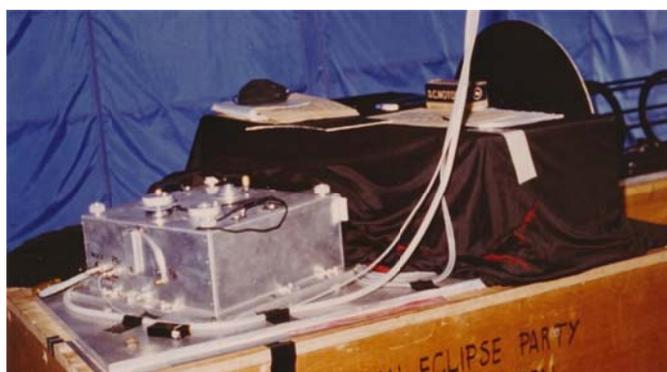


写真2

写真2の中央の暗幕につつまれたものは、写真1の器械が包まれているように見えるではないか！しかし、I氏によれば暗幕の左手のアルミ合金製の箱（写真3）がMKカメラであるというのである。



写真3 MKカメラ

筆者が、太陽塔望遠鏡棟の棚で発見した重厚、且つユニークな形をした写真1の器械を勝手に1980年のケニア日食のカメラと言ったわけではない。ケニア日食観測隊長であったH博士を塔望遠鏡に案内した際、H博士が懐かしそうに写真1の器械をケニア日食の観測に使ったカメラだといい、このカメラの設計製作に携わった担当者はI氏であったから詳しいことはI氏に聞けと言われていたのである。

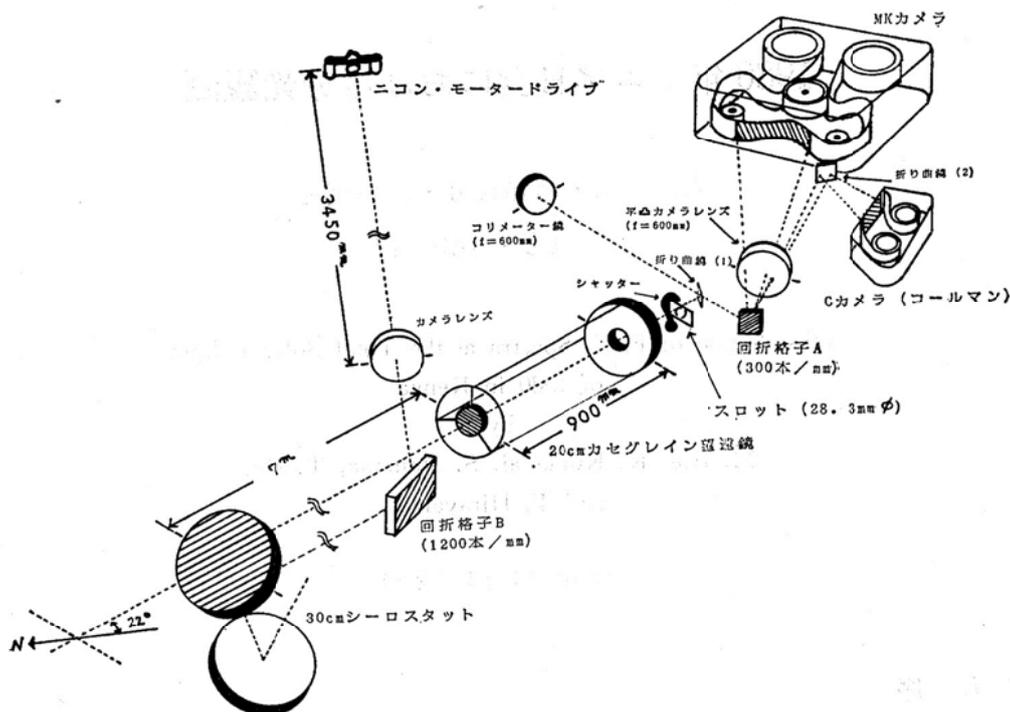


図1 光学系配置図

筆者が、I氏に確認せず、東京天文台報、天文月報記事を見て記事にしてしまったのが失敗であった。ケニア日食は分光観測が主目的で観測装置の光学図が図1である。

この騒動で、写真1はケニア日食で使用されたMKカメラではなく、実際に使用されたMKカメラは担当者であったI氏に無断で捨てられてしまっており、くわしいことが書けないのが残念である。このように担当者以外のものが、その価値をよく知らないで処分してしまう事態は過去にも何度も起きているのである。研究者は前を見ることに熱心であるが、後を見ることは不得手である。アーカイブという認識もなかった時代でもあった。

このMKカメラで得られたスペクトルを紹介しておこう。これは日食時の彩層のフラッシュスペクトルとコロナのスペクトル(写真4)である。こういったスペクトルは日食時でないとは得られないものであった。

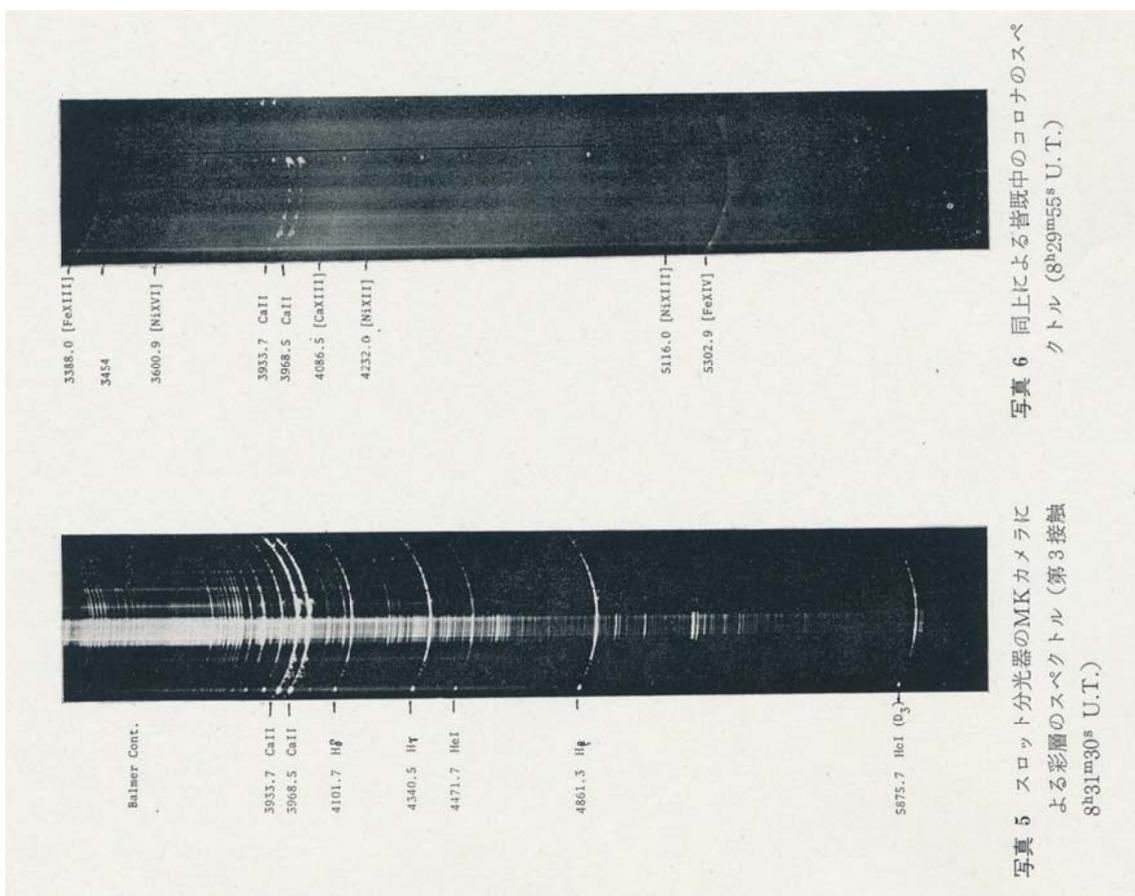


写真4 日食時の彩層とコロナのスペクトル

さて、写真1の観測器械が現存している。この素性はやはり知りたいので、せっかく書いた記事を生かそう。この後の記事を読んで心当たりの人が、これの素性を知らせてくれることを期待したい。

この写真1のカメラの蓋を開くにはどうやったらいいのかなかなか分らなかった。眺めまわしてやっと開いたのであるが、蓋に開←閉と書かれたハンドルが2個あるが、こ

これはフィルムマガジンの開閉を行うハンドルであった。蓋をあけるつまみは→の1個(写真5)で、これはちょっとした工夫の仕掛けであった。この工夫を言葉で表現するのは難しいが、本体の底部から立ち上がった柱の突起(写真6)にこのつまみの下面の隙間(写真6)がつまみを廻すことによって押しえつけるようになっている。



写真5 カメラの蓋をあけるつまみ



写真6 左から底部からの柱と突起、蓋の穴、つまみ

このように古い器械を分解して眺めると創意工夫に感心することが多い。そして、やっと蓋を開いたところ、観測で撮影されたフィルムマガジンは取りだされているが、マガジンの外のフィルムがそのまま残されていた(写真7)。



写真7 フィルムマガジンが取り出された後に残っているフィルム

フィルムの送り機構はなかなか複雑である。この装置はミタカ光機との名盤があるが現在の三鷹光器であり、天文台のいろいろな観測装置を手掛けた設計者の工夫が感じられる。日食時のいろいろなタイミングでのスペクトルを得るためのフィルム送り機構（写真8）である。



写真8 フィルムの送り機構

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)